

第3回

おこしものと

壊れた家族の

思い出

前編



「お雛ひなさま？ ああ、もうそんな時期になったんかね」

ホットコーヒーを差し出ししながら、敦子あつこが言った。

「ほうだわ。そろそろ飾りつけをせんとよ」

そう言って目尻めじりを下げたのは常連客の榊原清治さかきばらせいじだった。

「なにせ初節句だよ。うちのは七段飾りだで手間がかかるんだわ」

「それ、智恵ちえちゃんが生まれたときに買ったお人形さんかね？ 榊原さんのところで飾っとるの？」

「智恵のアパートは狭いで、よう飾れんのだわ。だで、わしのとこで飾ることにしたんだわ。今度の日曜にうちに見に来るとよ」

智恵というのが榊原のひとり娘で、今は結婚して大阪に住んでいる。昨年女の子を出産したので、もうすぐ初節句というわけだ。

「榊原さんもお祖父ちゃんになったんだねえ。榊原洋品店のわがまま息子がねえ」

「それ言わんという。昔の話だで」

榊原が苦笑すると、

「何言つとるの。さんざん放蕩しとったくせに」

と茶々を入れたのは、隣の席に座る岡田美和子だ。

「わたしがこっちに嫁入りした頃、あんたの噂はよう聞いたわ。またどっかで悪さしたとか」

「頼むから昔の話はせんという。顔から火が出てまうがね」

本当に榊原は顔を赤くしていた。

「でも、ちゃんと洋品店を継いで仕事しとったんだから、ええがね」

夫の栄一が助け船を出したが、

「ちゃんと仕事するようになったのは新子さんと結婚してからだがね。それまではもう」

「それくらいにしたって」

敦子も援軍に入った。

「昔はみんな、いろいろ元気だったわ。まだこの

「駅西も活気があったし」

「そうだわねえ。いいことも悪いこともあったわ」

美和子が昔を懐かしむように言う。矛先が逸れたとわかって、榊原は安堵の息をついた。

「雛飾りと言えばよ、俺この前、徳川美術館行ってきた」

話に入ってきたのは竹内匠だった。

「やっぱり、あそこのお雛さんはすごいな。見事だわ」

「ああ、あれはもう、徳川様のだでね」

敦子が頷く。徳川美術館はその名のとおり、尾張徳川家の大名道具や所有物などを収蔵している美術館で、国宝の源氏物語絵巻や三代將軍徳川家光の長女千代姫が尾張徳川家に嫁いだときの婚禮調度などが有名だ。毎年この時期には徳川家の姫君のためにあつらえられた雛人形や雛道具が展示されるのだった。

「ああいうのを見ると、女の子を生んどくんだっただと思うわ。わたしのお雛さん、もう何十年もし

まいったばなしだし」

「男だけだと、そういうときに味気ないわね。孫も男の子だし」

美和子がそう言ったとき、

「ただいま」

と、龍とおるが店に入ってきた。

「噂をすればだわ」

「え？」

「鏡味かがみ家の男の子。雛人形とは縁がないわね」

「雛人形？」

話の経緯を知らない龍は首を傾かしげる。

「こうなったら龍ちゃんに早はよ嫁さんを見つけて

女の子を生んでもらうしかないわねえ」

「曾孫ひまごの話かね。いくらなんでもまだ早いわ」

敦子が笑う。相変わらず龍は当惑している。

そのとき、店の奥にある鏡味家の私用ドアが開いた。

「ああ腹減った。何かない？」

のっそりと姿を現したのは敦子の次男、そして

龍の叔父に当たる宣隆のぶたかだった。

「こんな時間まで寝とって、何言っとるの」

敦子が小言を言うのと、

「しかたないじゃん。明け方まで仕事してたんだから」

と、言い返す。そのやりとりを聞いていた美和子が、

「あれ？もしかして宣隆ちゃん？」

不思議そうに訊いた。

「そうだよ、宣隆だて」

敦子が返答すると、

「あれまあ、その髪、どうしやあした？」

美和子は素っ頓狂な声をあげた。無理もない。

いつも伸ばし放題にしている宣隆の髪が短く刈られて、しかも白髪まじりになっているのだ。さらに額が頭頂部近くまで広がっていた。

「いつの間に、そんなに老けやあした？すっかりお爺さんだがね」

「いきなりあんなふうにしたんだわ」

敦子が苦笑混じりで言った。

「髪を短くして、わざわざ白髪みたいに染めて、

その上おでこのあたりはきれいに剃そってまって、
わざと老け顔にしとるんだわ。なんとかって外人
さんの物真ものまね似らしいんだけどね。何だったかね？
ほら、なんとか上手」

「ジョブズ。ステイブ・ジョブズだよ」

髪だけではない、うっすらと無がしやうひげ精髭を生やし、
丸縁の眼鏡もかけている。加えて身に着けている
のは黒いタートルネックにブルージーンズ。

「ジョブズって言ったたら、あれだろ、アメリカの
金持ちだろ」

榊原が言った。

「金持ちの真似かね。それで、本当に似とるの？」
美和子が訊くと、榊原は首を捻ひねって、

「どうだかしゃん、よおわからんわ」
すると宣隆はスマホを取り出し、操作した上で
美和子に渡した。

「それがジョブズだよ」

ディスプレイを覗のぞき込んだ美和子は眼めを丸くし
て、

「あれま、ほんとにそっくりだわ」

何度も画面と宣隆を見比べる。宣隆は澄ました顔で手を顎のあたり^{あご}に持っていった。ディスプレイに表示されているジョブズのポートレートとして有名な写真の真似だ。

「おお、似とる。そっくりだわ」

ディスプレイを見た榊原が声をあげる。どれどれとスマホを受け取った竹内も、

「ほお、たしかに似とるな。瓜^{うり}ふたつだがね」

「でしょ」

宣隆は得意満面だった。

「いくら似とるからって、わざわざ髪を白く染めたり禿^はげに見せかけたりせんでもええのに」

敦子が溜息^{ためいき}混じりに、

「そっくりショーにでも出るつもりなのかねえ」

「言ったじゃない。これも仕事だって」

宣隆が母親に言い返した。

「うちの宣伝のためにやってるんだよ。SNSに写真をアップしたりしてさ」

「うち」というのは喫茶ユトリロのことではない。

宣隆が友人たちと立ち上げた会社のことだ。スマ

ホ用のゲームを開発するとかで、彼はシナリオの執筆と、社の公式SNSアカウントで宣伝を受け持っている。いわゆる「中のひと」というものだが、ジョブズそっくりに自分をカスタマイズしてからは、顔出しで投稿していた。それが結構受けているようで、フォロワーも増えているらしい。

「宣隆ちゃん、結婚はせんのかね？」

唐突に美和子が訊く。

「え？」

予期しない質問に宣隆ジョブズはうろたえる。

「女の子を生んだってよ。そうしたら敦子さんも

雛飾りを出せるに」

「いや、俺は子供生めませんよ」

「当たり前だがね。嫁さんもらって赤ちゃんを生んだってって言っとるの。誰だれかいいひとおらんの？」

「いないいない。全然いない。結婚なんて考えてもないです」

態勢を立て直した宣隆は、はっきりと言った。

「三次元の嫁なんて要らないです。俺は二次元で

充分」

「にじげん？ 何それ？」

「それは……」

説明しかけて言葉を切る。

「……まあ、とにかく結婚はしないってことで」

「しようがないねえ」

美和子は肩を落とし、

「だったらやっぱり、龍ちゃんに期待するしかないわなあ」

龍に視線を向けた。

「……それは……」

再び矢面に立たされそうになった龍が言葉を濁したとき、彼のスマホが着信音を鳴らした。

「あ、すみません」

一言断ってスマホを操作する。LINEのメッセージだった。送り主は平野里央^{ひらのりお}。

【次の連載のネタについて打ち合わせしたく思います。今週中で都合のいい日時を教えてください】

その文字列を、龍は少し複雑な表情で見つめて

いた。
。

里央はプリンみつ豆を食べている。その名のとおりプリンが中央に鎮座しているみつ豆だ。

「美味しいですね、これ。オールドファッションな味がします」

表情を緩め、スプーンでプリンを掬^{すく}って口に入れていく。龍はアイスコーヒーを飲みながら、その様子を見ていた。

名古屋駅西にあるエスカ地下街の喫茶リッチ。

この地下街がオープンした一九七一年から営業している老舗^{しにせ}だ。現代風でもなくレトロでもない、程よく時間を経て落ち着いた雰囲気を手に入れた店だった。

「ひとつ訊いてもいいですか」

龍は言った。

「どうしてうち——ユトリロじゃ駄目だったんですか」

LINEでのやりとりで顔を合わせる日時を決

め、場所をどこにするかという段になったとき、里央から【鏡味さんの都合のいいところでもいいですよ】と言われたので、だったらユトリ口ではどうでしようか、と返したのだった。すると里央は【名古屋駅周辺がいいのなら、どこか他にいいお店はありませんか】と返してきた。それでこのリッチで会おうということになったのだが、龍は一連のやりとりに引かかかるものを感じていたのだった。

いや、引かかかるのはこの件だけではない。里央については雑煮の取材のときの妙に頑かたくな態度にもわだかまりを感じていた。あのときの様子からすると、もう「名古屋めし再発見」という企画は続けられないのではないかと思っていた。それが今日は何事もなかったかのように龍と会い、プリンみつ豆を食べている。

なかったことにしたいのだろうか。だとしたら、こちら知らん顔をしてこれまでどおりに接していればよかったのかもしれない。しかし龍には、それができなかつた。だから尋ねたのだ。

「ユトリロだと都合の悪いことがあるんですか」
すると里央はスプーンを置き、龍のほうを向いた。

「前にユトリロに伺ったとき、皆さんとても親切でした。ご主人はわたしのために電話までしてくれましたし。奥さんも親身になってくれて」

そう言ってから、続けた。

「わたし、そういうのが怖いんです」

「怖い？」

「温かく迎え入れてくれて気持ちよくなると、とたんに怖くもなるんです。この気持ちよさが無くなってしまったらどうしよう。急にみんなが冷たくなってしまったらどうしよう。じつは優しくしてくれているのはふりで、内心ではわたしのことを不愉快に思ってたらどうしよう。そんなことを考えはじめて、怖くなります」

「そんな。うちは祖父ちゃんも祖母ばあちゃんも、そんな裏表のあることなんか考えてないし」

「もしかしたら、そうかもしれませぬ。でも、そう考えちゃうんです。だから居心地のいいところ

ほどわたし、長くいられなくて」

里央は小さく首を振る。

「馴染なじみのお店とか仲のいい友達とか、そういうのが苦手です。逃げたくなります」

「友達も？」

「作りません。ていうか、要りません。他の人間とは仕事とか生活とかで最低限の付き合いだけし
てればいいんです」

これは筋金入りかも、と龍は思った。相当の人嫌いらしい。

じゃあ俺のことは、と訊きかけて、やめた。自分とは仕事上の付き合いと割り切っているのだから。それなら別にかまわない。こちらもそういう心構えで接することにしよう。

「『名古屋めし再発見』は続けるんですね？」

「もちろんです」

龍が切り換えたのを察したのだろう。里央も仕事モードに戻ったようだった。

「前回の雑煮も前々回同様、評判がよかったですから」

この頃では龍も「DAGANE!」の記事をチエックしていた。コメント欄には概ね好意的な感想が投稿されている。中には龍のことを「かわいい」「素敵」と書いている女性もいて、少しばかり面映いおもはゆ思いをしていた。

「編集長なんて連載を毎月、いえ、隔週でできな
いかって言ってるくらいです」

「それは無理です。こっちも大学があるし」

「わかってます。だから今までどおりのペースで
行きます」

「ならよかった。それで、次は何にするんです
か」

龍が質問すると、

「もうすぐ雛祭りですよね。名古屋で雛祭りとい
うと何だか知ってますか」

と、質問を返された。

「名古屋で？ 何か特別な行事とかあるんです
か」

「行事ではなく、食べ物です。おこしもん、って
知ってます?」

「おこしもん……いや、聞いたこともないですけど」

龍が答えると、里央はにやりと微笑む。

「やっぱり。これもこの地方独自のものですからね」

そう言うのと彼女はバッグからタブレット端末を取り出し、画像を表示させて龍に見せた。

「これがおこしもんです」

写っているのは人形の姿を象かたどった平たいものだった。白地に赤や緑や黄色がアクセントのように付いている。他にも鯛たいらしき魚や菊の花のようなもの、扇の形をしたものもある。どれも材料は同じものらしい。

「おこしもん、おこしもの、おしもん、おしもの、おこしもち、いろいろと呼びかたはあります。名古屋めしというより愛知県特有のもですね。米粉をお湯で練って木型に詰めて形を取り、それを蒸したものです」

「この色は？」

「食紅です。木型から外した後で色付けをするの

と、練った米粉の一部に色を付けておいて木型に詰めるときに配置するものと二種類あるそうです。もともとは家で作るものだったらしいんですが、今は和菓子屋やスーパーでも普通に売られていますね」

「へえ、これは知らなかったなあ。こういうものを食べてるんですね。これも作るひとによって味が違ったりするんですか」

「いえ、基本的に米と水だけで作るもので味付けはしませんから、誰が作っても同じですね。ただ、形はそれぞれ個性が出ます。昔から作られているものなので、型を取る木型も古いものが残ってるんです。今回はおこしもんの味よりも、その木型にスポットを当てたいと思ってるんです。もちろん鏡味さんには食べてもらいますけど、木型の取材にも付き合ってください」

「わかりました」

ふたりのスケジュールを照らし合わせ、取材日を決めた。

「じゃ、これで」

と席を立とうとしたとき、

「あ、ちよっと」

里央に呼びとめられた。

「この前、わたし変なこと言いましたよね。覚えてます?」

「えっと……何のことでしたっけ?」

変なこと、と言われても里央には何度も変なことを言われているので、どのことを指しているのかわからない。

「鏡味さんが医学生イメージと違うって話です」

「ああ、あれですか」

「はい。あれからどうしてそんなことを思ったのか考えてたんですけど、ふと気付いたんです。鏡味さんってお医者さんっていうより、喫茶店のマスターみたいだなって」

「喫茶店の? どういう意味ですか」

「接客に慣れてるって言うか、人付き合いの仕方がマスターっぽいですよ。酸いも甘いも嚙^かみ分けた感じが」

「俺、そんなに人生経験豊富じゃないですよ」

「わかってます。人生経験ならわたしよりずっと乏しいですよね」

そう言って里央は笑う。

「でもね、経験の有無じゃないんです。ひとの気持ちとかがすぐくわかって、いろいろ助言できる。長く生きてきたってできないひともあります。逆に若くてもそれができるひとがいても、おかしくないですよね」

「俺、助言なんて生意気なこと、してませんけど」

「してる、してない、じゃなくて、しそう、できそう、そんな感じ。わたしには絶対できないことですけど」

里央はそう言ってから、続けた。

「でも、そういうのって疲れませんか」

「なんか、いやな女だな、それ」

梅酒サワーを飲みながら、駿しゅんが顔を顰しかめる。

「なんでそう、おまえに突っかかってくるんだ？」

「わからないよ」

龍はそう言って、烏龍茶ウーロンチャで口を湿らせる。もう

成人したし酒が飲めないわけではないのだが、まだこうした居酒屋でアルコール類を飲むのには慣れていない。

名古屋の副都心と呼ばれる金山かなやまにふたりはいた。

「世界の山ちゃん」で山盛りの手羽先からあ唐揚げを挟んで座っている。

「おまえの話の話を聞いているとき、その平野ってひと、わざとやってるような気がする」

「わざとっ..」

「おまえを怒らせようとしてる」

駿は手羽先を手にとると関節のところであつたに千切り、肉が多く付いた元のほうを全部口にく

わえた。そして掴^{つか}んでいた骨を引き出す。こうすると肉の部分が歯でこそげ落とされ、骨だけが出てくる。名古屋人ならほとんどが会得している技だそうだが、龍にはまだ真似できないものだった。口の中の手羽肉を咀嚼^{そしゃく}しながら駿は言った。

「それっていじめじゃないか」

「いじめ、ねえ……そんなふうに意識したことないけどな」

「おまえが反応しないから、凶に乗ってるんだよ。そんなの、もう縁を切っちゃえよ。それとも何か、そんなに実入りのいい仕事か」

「それでもないけど」

「じゃあ平野ってひとに惚^ほれたとか」

「それはない」

「即答したな。怪しい」

「怪しくない」

「じゃあ、どうして続けてる？ 何か理由があるのか」

「理由……何だろうな」

手羽先に伸ばしかけた手を止め、龍は考える。

そして言った。

「……お手玉」

「はい？」

「小さい頃にさ、お手玉で遊んでたことがあったんだ。まだ母親が生きてて、なぜかお手玉を作ってくれた。端切れを縫って中に小豆あずきか何か入れて。遊びかたも教えてくれた。『もしもしカメよ』を歌いながらポーンって放りほう上げて、落ちてくる前にもうひとつ放り上げて、最初のを掴んだらすぐにまた放り上げて。母さんはすごく上手だった」

「話がどこに収束するのかわからないんだけど」

「俺も真似してやってみたんだ。でも全然できなくてさ。まだ小さかったからタイミングを掴むこともできなかった。それが悔しくてずっと何度もやってた。泣きながらやってた。そしたら親父おやじがそれを見て『男なんだからお手玉なんかできなくてもいいんだ』って言ったんだ。多分親切心で言ったんだと思う。無理しなくていいぞって。でも俺はやめなかった。どうしてだと思う？」

「負けず嫌いだったから？」

「俺はそんな性格じゃないな。別に負けてもかまわないタイプ。でもあのとき俺は、お手玉ができるようになったら何か楽しいことがあるんじゃないかなって思ってたんだ。だって……いや、まあ、そんな気がしただけ」

だって、母さんがお手玉をしているとき、あんなに楽しそうな顔をしてたから、とは言いにくかった。

「つまりさ、その先に何か楽しそうなことがあるんじゃないかって思うと、理不尽に辛いことも耐えられるって話」

「年上女性編集者からのいじめも、その先に楽しいものがあるって?」

「わかんないけどね。名古屋の食べ物をいろいろ食べるのも、いろんなひとに会うのも、その先にある楽しいもののためのような気がする」

「……わからんなあ。おまえって、ほんとわからんわ」

駿は呆れたように言った。

「俺もよくわからない」

そう言って、龍は手羽先にかぶりついた。

名鉄名古屋本線ありまつ有松駅を降りる。駅周辺はありふれた風景で特に変わっているところはないように思えた。が、少し南に進むと、町並みが変わりはじめた。時代劇で見るとような古い家が建ち並んでいるのだ。

「ここは旧東海道です」

先導する里央が言った。

「ここをさらに南に行くと、合戦で有名な桶狭間おけはざまがあります。慶長十三年、西暦だと一六〇八年に、この有松に新しい集落が作られました。そして移住してきたひとたちによって有松絞りが作られるようになったんです。絞りって知ってます？」

「たしか、布の染めかたでしたっけ？」

「そうです。布を糸で絞って染めると、絞ったところだけが色が付かなくて模様ができる。基本はそういうことですけど、実際はもっと複雑です。だからいろいろな模様を作ることができるんです。

この町並みは当時の商家がそのまま残っているものです」

観光ガイドよろしく里央が説明する。言われてみると町のあちらこちらに「有松しほり」の看板や暖簾のれんが見えている。「有松・鳴海なるみ 絞会館」という看板を掲げた建物もあった。

「ここで有松絞りの取材をしたことがあるんですけど、今日はそのときに知り合いになった方のお宅に伺います」

「そのひとの家も絞りを作ってたんですか」

「昔はやっていたみたいですね。もうずいぶん前に廃業したそうですけど。古い家で、昔からの道具も残ってるそうです。取材のときの雑談で、おこしもんの木型も大事に取ってあると、その家の大奥様に教えてもらったのを思い出して……あ、ここです」

彼女が指差した先に、黒塀に囲まれた古い民家があった。表札には「牛田うしだ」とある。

門柱には塀とは少々不釣り合いな真新しいインターフォンが据え付けられている。里央がそのボ

タンを押して家の者と話をすると、程なく門が開いた。

「ようこそ、いらっしやいました」

姿を見せたのは和服姿の女性だった。四十歳代だろうか、肌が白く、結い上げた髪も艶やかに黒かった。身に着けているのは藍色の着物で臙脂色の帯を締めている。

「はじめまして。『DAGANE!』編集部の方野と申します。失礼ですが牛田恒雄さんの奥様ですか」

「そうです。芳枝と申します。主人ともどもお待ちしておりました。さあ、どうぞ」

門の中に招き入れられた。前庭も純和風で、苔むした灯笼や丁寧に剪定された椿の植え込みなど、落ち着いた造りだった。

ふたりは客間らしい十畳の和室に通された。

「少しお待ちくださいね」

そう言って芳枝が席を外す。龍は室内を見回した。

「なかなかいい雰囲気ですね」

床の間には白磁の壺つぼが置かれ、桃の花を描いた掛軸が掛かっている。見上げると天井はかなり大きな板で作られているし、目の前の卓も年代物のようだ。

「この家も古いのかな」

「でしようねえ」

そんな話をしているうちに、芳枝が盆を持って戻ってきた。

「どうぞ。もうすぐ主人が参りますので」

差し出された白い湯飲みから柔らかな香りが立った。

「ありがとうございます。いただきます」

口に含んだ茶はぬるめで、だが驚くほど香り高く甘く感じた。きっと高級な茶葉なんだろうな、と龍は思った。

「あの、このお屋敷はやっぱり古いものなんですか」

里央が尋ねると、

「はい、江戸末期に建てられたと聞いております」

芳枝が答える。

「もともとは藍染めの工場みたいなところもあったそうなんです、それは明治に入ってから潰つぶしてしまつて、今は住居の部分だけ残っていますの。正直、今時の住宅に比べると住みにくいところもあるんですよ。冷暖房などはあまり効きませんし。もう慣れましたけど」

屈託のない口調だった。

「ところで平野さんは去年の有松絞りまつりのときに主人とお会いになつたんですよね？」

「はい、恒雄さんと大奥様にお会いしてお話を聞かせていただいたんです」

そう言つてから、龍に向き直り、

「毎年六月にこのあたりでお祭りが行われるんです。山車だしが出たりパレードが行われたり絞り染めのワークシヨップがあつたり。お祭りというよりイベントですね」

「主人もまつりの手伝いをしておりますの。義母ははも以前は絞りの仕事をしていたので」

芳枝がそう言つたとき、

「お待たせしました」

長身の男性が老女を伴って入ってきた。男性は四十代後半くらいの年頃で、ほっそりとした顔立ちをしていた。髪はきつちりと七三に分け、鼻の下の髭はきれいに整えられている。身に着けているのは濃紺の和服で、着慣れているような所作だった。

男性に手を取られて入ってきた老女も、やはり和服を身に着けている。ねずみ鼠色の着物の上にあおむし青藤色の羽織。品の良い雰囲気だった。少しばかり足取りがおぼつか覚束ないようだったが、穏やかな表情でふたりの来客にあいさつ挨拶をした。

「ようこそお出いでくださいました。牛田カツ子こと申します」

向かいに腰を下ろすと、老女はそう言って頭を下げた。

「カツ子さん、一年前に有松絞りまつりでお会いしました平野里央です。お久しぶりです」

里央がそう挨拶をすると、老女は少し首を傾げた。

「あれ、お会いしたことがありましたかねえ。すみません、すっかりもつろく耄碌してまっつて、物覚えが悪うなりました」

「いえ、とんでもございません。今日のご無理を申し上げてすみませんでした」

「はて、何のことでしたかね？」

「おこしもの木型を見せていただく、という」

「おこしもん……ああ、あの型ねえ。あれはねえ、古いもんなんですよ。わたしの母がわたしのために用意してくれたものでねえ」

カツ子は楽しげに言う。

「恒雄、あの型、このひとたちに見せたって」

「はい。では、こちらへ」

恒雄に促され、龍と里央は立ち上がる。

「ここに持ってきたらええのに」

カツ子が言うと、

「いえ、あれは大事なものなので」

恒雄は言葉を返し、客間を出る。ふたりは後についていった。

表からはわからなかったが、牛田邸は結構な広

さがあった。廊下を何度も曲がり奥へと進む。やがて勝手口らしき土間に出た。ここで下駄を借り、外に出る。

「これは……」

そこに現れたものを見て、龍は思わず声をあげた。

「土蔵、ですか」

建物の上半分は白い漆喰しつくいで、下半分は平瓦ひらがわらを並べた隙間すきまに蒲鉾かまぼこ状の漆喰が盛られている。いわゆる「なまこ壁」と呼ばれるものだな、と龍は自分の知識を動員して目の前の建物を描写する。

「この土蔵は新しそうですね」

里央が言うと、

「いえ、改装したので外観が新しくみえるだけです。実際は母屋と同じ頃に建てられたものです」と恒雄が答え、懐から何やら取り出す。見るとそれは、鉄製の大きな鍵かぎだった。それを土蔵の扉に掛かっている、これもまた大きな錠前に差し込み、回した。

ますます時代劇みたいだな、と龍は思った。

開かれた蔵の中は、ひんやりとしていた。思ったほど埃臭ほこりくはない。置かれているものも、きちんと整頓せいとんされていた。大きな木箱や葛籠つづらが整然と並んでいる。これも意外だった。

「先程も言いましたように十年前に土蔵ごと改装しまして、そのときに中身も整理したんです」

龍の心を読んだかのように、恒雄が説明した。

「なんだか、お宝が眠ってそうですね」

里央が言うと、

「私もそう思っこぶつして古物商に見てもらったんですが、それほどありませんでした。テレビの鑑定番組に出ようかという夢も消えました」

恒雄は微笑んだ。

土蔵は二階建てになっていた。梯子はしごかと思うほど急な階段を上がると、そこにも木箱が並んでいた。

「下には主に商売をしていた頃の道具が置いてあって、こちらには昔の調度があります」

木箱の間に茶筴ちやだんす筒や木製の火鉢も置かれている。

これも時代劇に出てくるやつだな、と龍は火鉢に

顔を近付ける。かすかに灰の臭いにおがした。

恒雄は茶箆笥の隣に置かれた行李こうりを引き出し、開けた。中に麻布らしいもので包まれた四角いものがふたつ入っている。彼はそれを取り出すと布を広げた。

「これがおこしもんの型です」

木製の板が何枚か重ねられている。大きさは縦が二十センチ、横が十五センチ、厚みは五センチほどだろうか。どれも同じ大きさだった。それを恒雄が一枚一枚床に並べる。

「へえ……」

その中の一枚を覗のぞき込んだ龍が声を洩もらす。表面には細かな彫刻が施されていた。よく見るとそれは鯛のような魚が尾おびれ鰭をくるりと巻いているような形だった。

「この彫刻された部分にお湯で練った米粉を押し込んで、型を取るんですね？」

「そういうことのようなです。私は見たことがないんですが」

「この木型が使われているのを？」

「ええ、うちには女の子がいませんでしたのでね。母が生んだのは私ひとりだし、私たち夫婦にも子供がおりません。最後にこの型で作ったおこしもんを食べたのは母でしょう」

「あの、やっぱりこの型を使っておこしもんを作っていたたくわけにはいきませんか」

里央が言うと、

「それはすでにお話ししたとおり、できかねます。もう何十年も使っていないものですしね。最初にそう申し上げたはずですけど」

「はい、そう聞いてます。でも、そこをなんとかなりませんでしょうか。カツ子さんにお願ひしたときは、おこしもんを作ってもかまわないと仰おつしやつてくださったんですけど」

重ねて里央が言うと、恒雄の表情が険しくなつた。

「今になってそういう話をされるとは心外です。そういうことでしたら、申しわけないがお引き取り願えませんか」

ちよつと雲行きが怪しくなってきたな、と龍は

里央のほうを盗み見た。

「……勝手なことを言ってますみませんでした」

里央は頭を下げた。

「では、写真だけでも撮らせてください。お願いします」

「……わかりました。ただし、型には触らないでください。この型を扱えるのは牛田家の人間だけと決まっておりますので」

恒雄の言葉に今度は里央の表情が硬くなる。が、反論はしなかった。

「鏡味さん、並べられた型と一緒に写真を撮りますから、そこに座ってください」

「あ、はい」

指示されるまま、並んだ木型の前に座り、ポーズを取った。里央は続けてシャッターを押す。

「もう少し右へ。そう、それから顔をこちらに向けて……いいです。あ、ちょっと」

手を伸ばし、木型の位置を変えようとする。

「触らないでください」

即座に恒雄が言った。

「あ……すみません」

叱責しつせきされた里央は少しばかり強張こわばった表情で、

「じゃあ、明るいとところに並べ直していただけませんか」

と言う。恒雄は黙って木型を移動させた。

こうして撮影は二十分ほどで終了した。

「ありがとうございます。終わりです」

里央が言うと、恒雄はそそくさと木型を麻布で包み直し、木箱に収めた。

蔵に鍵を掛け、最初に通された和室に戻る。カツ子と芳枝はまだそこにいて、お茶を飲んでいた。

「お世話になりました。おかげさまで撮影できました」

里央が礼を言うと、カツ子はにんまりと微笑んで、

「本当にあんなものでよかったですかねえ。余所よそ様にはもっと立派な型があるでしょうに」

と言う。

「いえ、素敵な型でした。あれでおこしもんを作ったら、とても素敵なものになったと思います」

「そうですか。わたしも子供の時分にあれで作ってもらったきりでしてねえ。そういえばもうずっと、おこしもんを食べてませんわ。まあいっぺん、食べてみたいわねえ」

「じゃあ、お店でおこしもんを買ってきましょうか」

芳枝が言うと、

「おこしもんは買うもんじゃないて。あれはうちで作るもんだて。そんなこともわからんの？」

いささか突慳貪つっけんどんにカツ子が応じる。

「はい、すみません」

あまり気を悪くした様子もなく、芳枝が謝った。

「では、そろそろ」

そう言って促したのは、恒雄だった。

「あ、はい。今日はお世話になりました」

里央が頭を下げたので、龍もそれに倣ならった。

家の外まで見送ってくれたのは芳枝だった。

「何のお構いもできませんで、すみませんねえ」

「いえ。今日はお世話になりました。では、失礼します」

一礼して辞去すると、里央は駅に向かって歩きます。その背中を見て龍は思った。あまり機嫌が良くはないようだ。

「……なんかなあ」

案の定、彼女は不満げに呟いた。

「なかなか難しいひとでしたね、牛田さんって龍が言うと、

「ですよねえ。カツ子さんに木型を見せてほしいってお願いしたときは、もっと快く承諾してくれましたよ。あの型でおこしもんを作ってもいいって言ってくれたし。それが後になって恒雄さんが口を出してきて、結局こういうことになっちゃって」

はあ、と里央は溜息をつく。

「鏡味さん」

「はい」

「これからわたしのアパートに来てください」

「え？ どうして？」

「鏡味さんがおこしもんを食べる写真を撮りたいんです。どこかで買って、うちで焼きます」

「あ……でも……」

「何か？」

「いえ、平野さんのアパートって、独り住まいな
んですか」

「ええ、もちろん」

「それはやっぱりまずいですよ。女性の独り暮らしの
ところに行くのは」

龍が言うと、里央は首を傾げて考えるような表情
になり、唐突に言った。

「鏡味さん、わたしを襲う気ですか」

「と、とんでもない！ そんなことするわけない
でしょ」

龍は慌てふためく。

「だったらいいじゃないですか」

「だから、そういう問題じゃなくて……やっぱり
そういうの、よくないですよ」

「そんなに気を遣わなくてもいいのに。おこしも
んを食べるだけなんだから」

「それだけなら、他でもできるでしょ」

「他って、どこですか」

問われて、龍は一瞬言葉に詰まる。

「ないのなら、やっぱりわたしのアパートに

」

「いえ！ あります！」

里央の言葉を遮った。

「とりあえず、おこしもんを買いましょう」